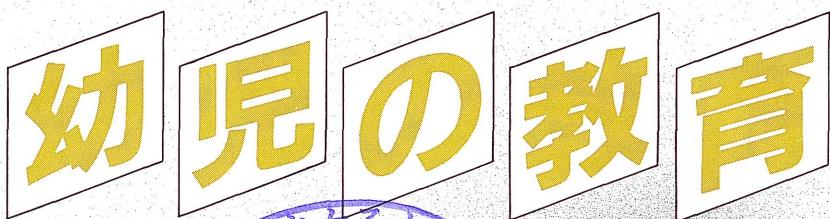


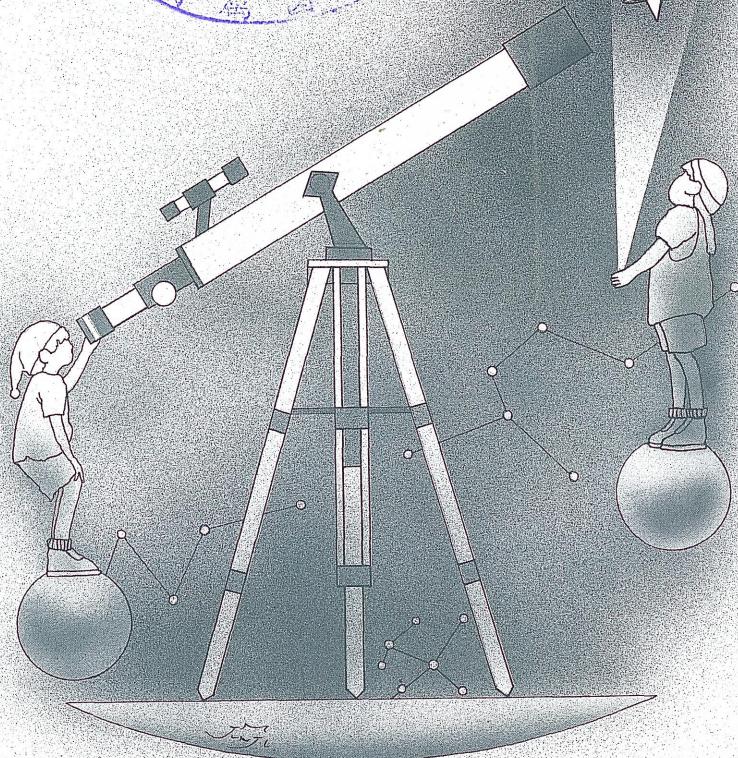
N24
1
94[2]

家庭・保育所・幼稚園



1995

7



第94巻 第7号 日本幼稚園協会

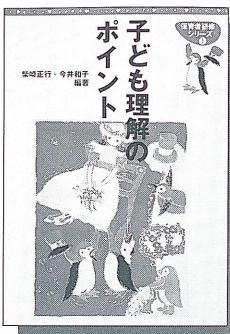
保育者研修シリーズ

- 園内研修資料として最適
- 保育の見直しに役立つ

新しい保育の考え方による保育技術の実践書で、中堅保育者としてこれだけは身につけておきたい保育方法が分かり、保育全体が見通せるようになる。中堅保育者の保育の見直しにも好適。

日常、保育現場で起こる疑問や迷いを、子ども理解、子どもの生活と計画、援助、環境など四種類に分け、それそれに実践例をつけて問題点に答えたもの。子どもと保育の基本がよく分かる。

① 子ども理解のポイント



保育は子どもをよく知ることから始まる。子どもの生活の理解、育ち合いの理解、発達の理解、関係の理解などに視点を当てベテラン保育者が実践事例をそえて子ども理解のポイントを示したもの。

柴崎正行+今井和子 編著

B5判・128頁・定価 2,000円（本体 1,942円）

② 生活と計画のポイント



生活と計画の ポイント

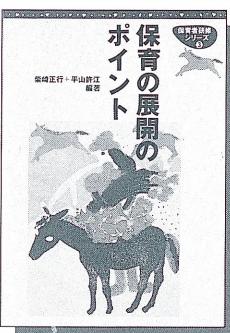


保育計画の作成、計画と実践の見直しをはじめ、教育過程の編成までを書きやすい記録づくり、使いやすい計画づくりに焦点をあてて生活に合わせた計画作りを解説したもの。子どもを中心の保育への見直しに役立つ本。

柴崎正行+川合貞子 編著

B5判・136頁・定価 2,000円（本体 1,942円）

③ 保育の展開のポイント

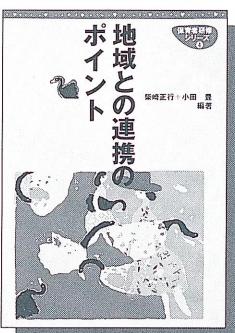


保育実践でむずかしいとされている援助の仕方やタイミングについて解説したもので、子どもの気づきや工夫、発想を生かした展開を中心に園生活の流れにそった展開方法をまとめたもの。子どもをいきいきと生活させる保育の見直しに役立つ。

柴崎正行+平山許江 編著

B5判・168頁・定価 2,000円（本体 1,942円）

④ 地域との連携のポイント



地域との連携の
ポイント



子どもの成長は環境の生かし方によって大きく左右される。保護者との信頼関係、保護者の要望と悩み、地域との信頼関係、地域の行事、環境、人材の生かし方、保育者間の連携など、地域に開かれた園づくりのポイントが分かる本。

柴崎正行+小田 豊 編著

B5判・146頁・定価 2,000円（本体 1,942円）

キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育

第94巻 第7号



幼児の教育 目 次

第九十四卷 第七号

© 1995
日本幼稚園協会

子供讃歌

(4)

第21回 OMEP 世界大会を目前にして

津守 真 (6)

倉橋惣三の保育論に関する一考察

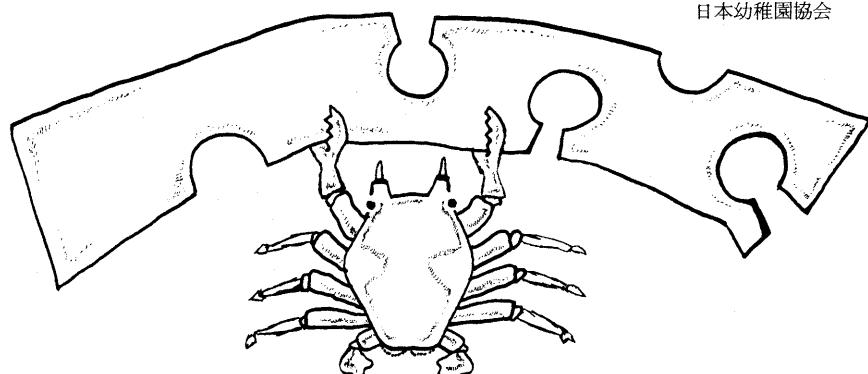
松川 恵子 (11)

動物行動の研究から(2)

イルカとの出会い 柴坂寿子・則竹詳子 (20)

夏の夜話

近藤 雅之 (28)



音楽リズム・オン・ステージに参加して

保育者の自己変革を目指して

小崎 祥子… (34)

ある日の育児日記から(55)

佐藤 和代… (41)

OME P (世界幼児保育・教育機構) 世界大会開催にむけて…畠中 徳子… (42)

幼児教育から見たリトミック……………高松弥生子… (50)

私の子ども時代(8)

昭和の初めの頃の幼児の過ぎし日を振り返り……………陳 繡… (57)

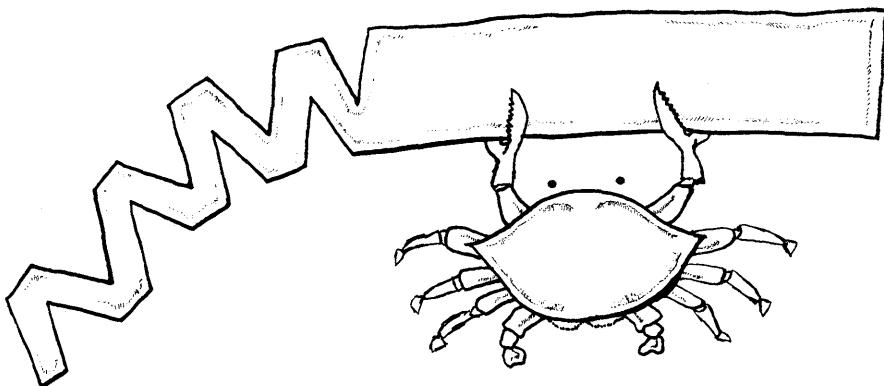
表紙・松永 潤二／扉題字・津守 真
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット・彌永たたえ

編集委員・田代 和美／本田 和子

桙田 正子・伊集院理子

編集部・大沢 啓子

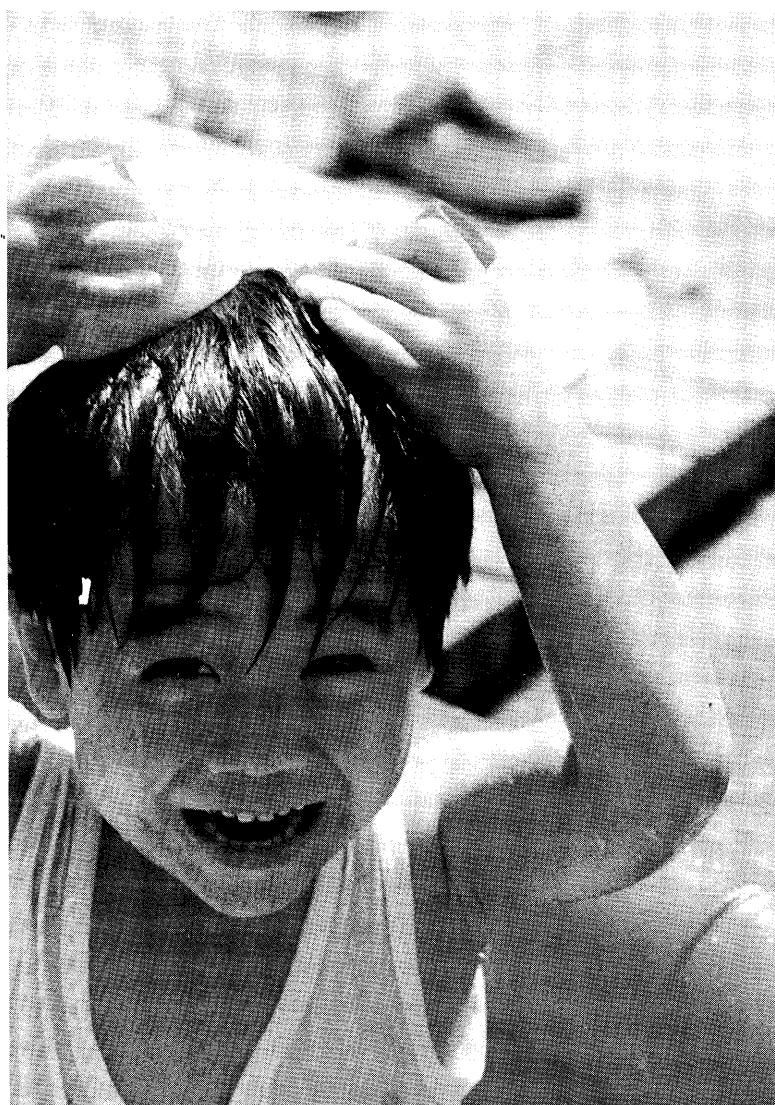


~~~~子供讚歌~~~~

こうやっていると、すずしくて気持ちいい！

撮影・平野 清





第21回 OMEP 世界大会を

目前にして

津守 真

OMEП世界大会が八月一日から四日に、パシフィコ横浜で開かれる。私はその責任を負つており、世界大会を目前にして、多くの方々と共に、心身ともに緊張して過ごしている。いま、日本も世界も大変な時であるが、世界が動乱のただ中にあっても、幼児の保育をする人々は互いに交わりつけ、学びつづけることが自分自身の向上に必要なことであると思う。それこそがこれからの世界の平和の基礎である。

OMEPとは何か

OMEPは、幼児の幸せのために協力する国際機関である。第二次世界大戦直後、一九四八年に未だ戦火の消えないヨーロッパで創設され、現在では六〇か国以上の国が加盟している。ユネスコ、ユニセフ、EUと連携して活動している（ユネスコは、幼児を〇歳から八歳までと定義している）。

次の文章は、ノールウェーのバルケ女史が世界総裁だったとき、ある年の世界理事会の机の上においてあつたものである。OMEPが幼児と保育についてどのように考えているかをよく示していると思うので、引用したい。

OMEPはこう考える

〈子ども〉

OMEPは、ひとりひとりの子どもを、その文化と社会に創造的に貢献しうる独自な人間として尊敬する。

〈人生の段階〉

OMEPは、幼児期を、人間の生涯の中で、配慮と、愛と、支えを必要とする傷つきやすい危機的な時期と定義する。

〈生活の文脈〉

OMEPは、子どもを取り巻く重要な人々——家族、保育者、近隣の人々——を含めて

幼児に対する方策を考える。

〈質〉

OMEПは、良質の幼児保育は保育者の質にかかるており、彼らは特別の支援を必要とするとしている。それ故に、OMEПは保育者の一層の成長を可能にする機会を提供する。

〈平和〉

OMEПは、万人のための教育を、世界平和のための教育と理解する。それ故に、子どもたちは社会的有能性と異文化理解を発達させることを必要とする。

〈代弁者〉

OMEПは、そのメンバーと代表者たちとの活動を通して、政治と国と国際レベルで、幼児及び彼らのニードの代弁者となつて働く。

〈連帯〉

OMEПは、国と民族と政治の境界及びいかなる集団的利害をも超えて、世界的危機の際の犠牲者である幼児の利益を擁護するためにパートナーシップを樹立する国際機関である。

OMEПは創設以来約五〇年を経た。その間、政治も社会も思想も変化し、幼児保

育・教育の考え方も幾度か変遷した。その期間を通じて、OME Pは常に子どもを全人としてとらえる保育の実践者の見識を重んじてきた。私がOME Pにかかるようになってからは十二年程であるが、OME Pの指導者たちのその心意気に感じさせられ、日本の保育者もその大きな流れに加わることを望んだ。これはヨーロッパに始まつた運動であるが、右に記した保育觀はアジアにも共通のはずである。しかし、どの時代にも、その時代の潮流との葛藤と戦いを伴つた。現代においては、女性の社会的地位の向上、母親の就労に伴う保育問題は世界に共通である。自然環境の破壊、都市化、子どもの生活の変化なども世界に共通の問題である。先進国では少子化の問題も共通である。世界の保育者たちはこれらの葛藤とどう取り組んできたか、また、いまだどう取り組んでいるのか。

今回の世界大会のプログラムには、このような現代の問題が取り上げられている。

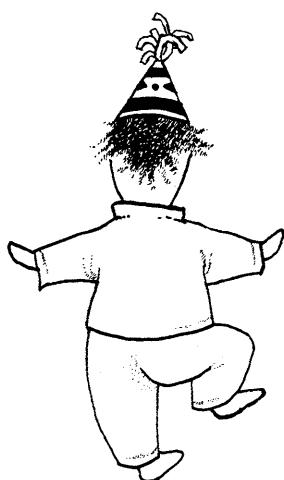
なぜ世界大会かを再び考える

子どもを愛し、子どもが人間として健やかに育つようにと真剣に願う保育者が世界中にある。OME P世界大会はその人々が三年に一度集まる機会である。日本の保育者もその人々と手をつないで、世界の大きな流れに加わろうではないか。それは私共が世界平和に寄与する道である。

本誌の読者で、まだ登録を済ませていない方は、どうかあるつて登録して参加して
頂きたい。

※問い合わせは、本誌49頁をいらん下さい。

(愛育養護学校)



倉橋惣三の保育論に関する一考察

（現代の保育実践の視点から）

松川 恵子

私は十数年保育者として生活していますが、その中で一番大きな出来事は、平成元年の「幼稚園教育要領」の改訂でした。この改訂によって、保育者が「望ましい活動を与える」保育から子ども中心の保育へと、保育が質的に転換しているという指摘が多くなされ、そしてそれは倉橋惣三の考え方へ還ることだとも言われています。私自身、倉橋保育論を多少なりとも継承しているのではないかと、ちょっと自惚れて考えていたので、この改訂

によって自分の理想とする保育を堂々と追究していくのだという喜びで一杯でした。しかしよく考えて見ると、私が読んだことのある倉橋の著作は『育ての心』だけであり、倉橋理解が一面的なのではないかと思えてきました。丁度このような時にもう一度大学院で学ぶという機会を頂き、これからの保育を考える上で倉橋惣三の保育論をきちんと知つておきたいと思い、右記の題目で倉橋研究に取り組みました。この研究は倉橋保育論を基

に現代の保育実践の在り方を探ることを目的としており、私自身の保育の実践や考え方を深めるために行つたものです。些細な研究ですが、倉橋にゆかりの深い本誌で紹介させて頂けるということは、私にとってとても幸運なことだと思っております。

なお、研究の対象ですので、倉橋惣三先生の敬称は省かせて頂きます。

一 倉橋惣三の保育論の概要

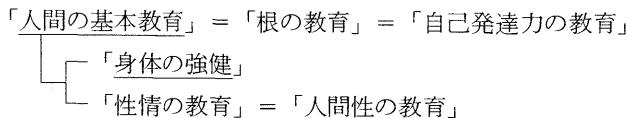
私は倉橋の保育論の変遷の過程を、基本的な保育論（理論）が形成された時期（第Ⅰ期、明治45年～昭和6年）、実際の保育方法について探り「誘導保育論」を提起している時期（第Ⅱ期、昭和8～20年）、戦後民主主義の時代を迎えて誘導保育論を再構築している時期（第Ⅲ期、昭和20～30年）と大きく三期に分けて考えています。

第一期は基本的な保育論（理論）が形成された時期で

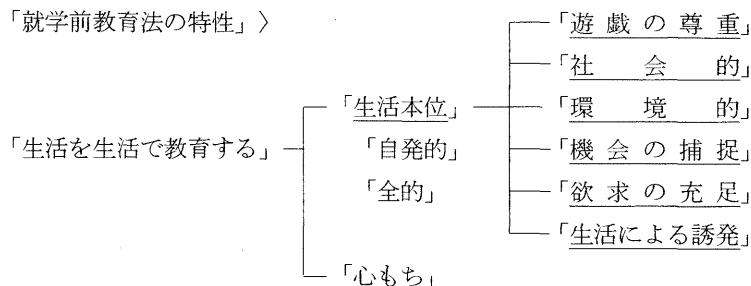
あり、倉橋が初めて保育についての自分の考えを「勝手に自由に」述べた明治四五年の京阪神三市連合保育会での講演「幼児保育の新目標」から、昭和六年の『就学前の教育』までの倉橋の保育に関する著作（「保育入門」「幼児教育の特色」「幼児の心理と教育」）を読み進め、倉橋の基本的な保育論（理論）は『就学前の教育』に集約されているのではないかと考えました。『就学前の教育』は、昭和六年に岩波講座『教育科学』第六巻に收められたもので、倉橋の著作の中では最も理論的なものであると言われています。保育の歴史や当時の日本の幼稚園教育の状況を踏まえた上で、「第六章 就学前教育の本義」で倉橋の考える保育論を展開しています。それは、就学前教育は「人間の基本的教育」であり、「身体の強健」と「性情の教育」を目的とし、方法として、
1. 生活本位（幼児の「自発的」「全的」な生活を本位とすること）
2. 遊戯の尊重（幼児の生活の中心は自発的遊びであること）

『就学前の教育』「第六章 就学前教育の本義」

〈「就学前教育の主目的」〉



〈「就学前教育法の特性」〉



第Ⅱ期は、実際の保育方法について探究している時期であり、保育の実際にについて考えている倉橋の論稿を読

3. 社会的（十分な相互の交渉が行われること）

4. 環境的（環境により幼児の自発的活動を誘発促進すること）

5. 機会の捕捉（幼児の心もちに共感し、機会を捉えて教育すること）

6. 欲求の充足（幼児の欲求を充足させるための助力をすること）

7. 生活による誘発（保育者も真に生活することにより、幼児の自発的活動を誘発すること）

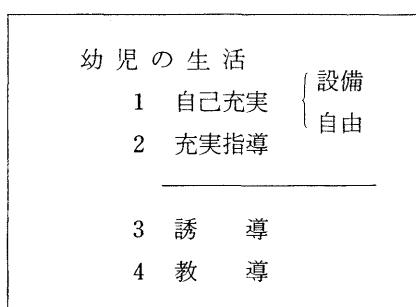
8. 心もち（心もちの生活をしている幼児に対する教育は、心もちのあるものでなければならないこと）
の八つの特徴があるというものです。倉橋の場合、理論といつても子どもたちと共に生活する中から生み出されたものであり、子どもの生活から離れていないということころが大きな特徴であると思います。

み進めました。倉橋は、彼の最も代表的な著作である『幼稚園保育法真諦』（昭和九年）で「誘導保育論」を提起しています。『幼稚園保育法真諦』は昭和八年の日本幼稚園協会主催の夏期保育講習会での講義「幼稚園保育の真諦、並に保育案、保育過程の実際」を加筆整理し、第四篇として東京女子高等師範学校附属幼稚園（現在のお茶の水女子大学附属幼稚園）で当時行われていた誘導保育案の実践を加えたものです。「第一篇 保育法真諦」では、幼稚園保育法は実に「対象本位」になされるものであり、幼稚園は児童にふさわしい無理のない生活形態でなければならず、まず十分に自然な子ども的生活形態を形づくらせ、設備と自由を与えることによって十分の自己充実ができるようしていくことが保育法の第一の要諦であるとした上で、保育法の第二として充実指導、第三として誘導、第四に教導をあげており、この保育法は次の〈図1〉で的確に表されています。

「第二篇 保育案の実際」「第三篇 保育過程の実際」「第四篇 誘導保育案の試み」は、「第一篇 保育法真諦」の実際例を示したものであり、現代の保育実践の視点から見ると妥当でないと考えられるところもありますが、当時の保育実践としては画期的なものだったと思います。

昭和八年に発表された誘導保育論は、日本が戦争へと向かう時代の中で、次第に国家主義の影響を受け、変容

〈図 1〉



していきます。昭和九年の「保育項目の実際」、昭和十一年の『系統的保育案の実際』、昭和十一年の「保育案」、昭和十二年の「幼児教育の文化性」と時代に沿つて読み進めながら、誘導保育論の変容の過程を追うことを通して、戦前の倉橋の保育論には、子どもの生活に即して考えようとする面と、封建家族制度を背景とした人間の捉え方の両面があつたのではないかと推論しました。しか

し、このことは現代の視点から批判すべきことではなく、むしろ国家主義の時代にも、戦時中にも、子どもの生活を重視し、子どものことを第一に考え続けていた倉橋を評価するべきであると思います。特に、太平洋戦争が始まった年であり、戦時色の強くなっていた昭和十六年に『改訂増補 系統的保育案の実際』を出したことは、戦時中であつても保育を真剣に考え続けていたといふことの証であり、戦前から戦後への倉橋の保育論の変化の過程を明らかにするためには、この『改訂増補 系統的保育案の実際』や戦時中の附属幼稚園の保育の実際を探っていくことが手がかりになるかも知れないと考えています。

第三期は、戦後、民主主義の時代を迎え、第二期の誘導保育論を再構築している時期であり、戦前の論稿を捉え直している論稿を読み進めました。昭和二十二年の「学校教育法における幼稚園」は、戦後制定された「教育基本法」や「学校教育法」の精神からこれからの幼稚



園教育のあり方を考えたものであり、平成元年改訂「幼稚園教育要領」と共通性があります。それは、幼稚園は自發的な遊びを中心とする実際生活であり、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること、幼稚園教育は環境を通して行うものであること、等であり、どちらも教育の原点に戻って考えようとする精神において共通なのではないかと考えます。倉橋は戦後まとめた保育論を著してはいないのですが、それは『幼稚園保育法真諦』が新しい時代にも通用するものであると考えていたからであり、考え方を変えたところを『幼児の教育』誌上に小論として掲載しているのではないかと考え、続けて『幼稚園の生活形態』『幼児の生活の場としての幼稚園』『保育案と生活計画』『幼稚園を幼児の生活に返せ』「幼児の自らもつものを」を読み進めました。その結果、第Ⅱ期には「誘導」が中心の保育論であったのが、戦後は「自発」が保育論の中心にあることがわかり、「誘導」の捉え方も保育者の目的の方へ追い込むものではなく、「自己充実」を導くものという捉え方に

わっている（第Ⅰ期の「誘導」の捉え方に戻っている）ことが理解されました。そして昭和二十八年、倉橋は『幼稚園保育法真諦』を『幼稚園真諦』としてかなりの加筆訂正をして復刊し、倉橋のより本質的な保育論として再生させたのです。『幼稚園保育法真諦』から『幼稚園真諦』へとなつた際の大きな変更は、

1. 書名及び第一篇の題名の変更

2. 保育法を表す図の変化（図1→図2）

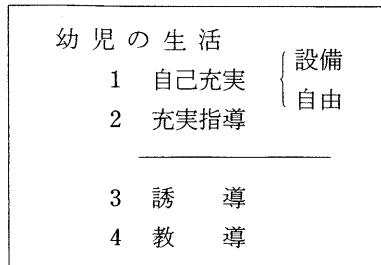
3. 「誘導」の捉え方の変更

4. 「第四篇 誘導保育案の試み」が削除されていること

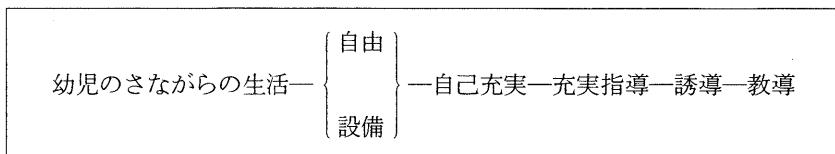
等があり、特に2. の図の変化が大きいと考えています。

〈図1〉では充実指導と誘導の間に線があり、この線に私はこだわっていて、線の前の1、2、と線の後の3、4、とでは保育者の視点が違うのではないかと考えています。1、2、はあくまでも子どもの生活に即しているとしている保育者の姿があり、3、4、では保育

〈図 1〉



〈図 2〉



者の考える目的の方へ引っ張つてこうとする保育者がいるよう思えるのです。それに比べて〈図2〉では保育者の視点の変化はなく、それぞれの子どもの状態に応じてかかわり方が選択されるのではないか、そしてそれも段階を追っているのではなく、右方向へも左方向へも流れるものではないかと考えています。

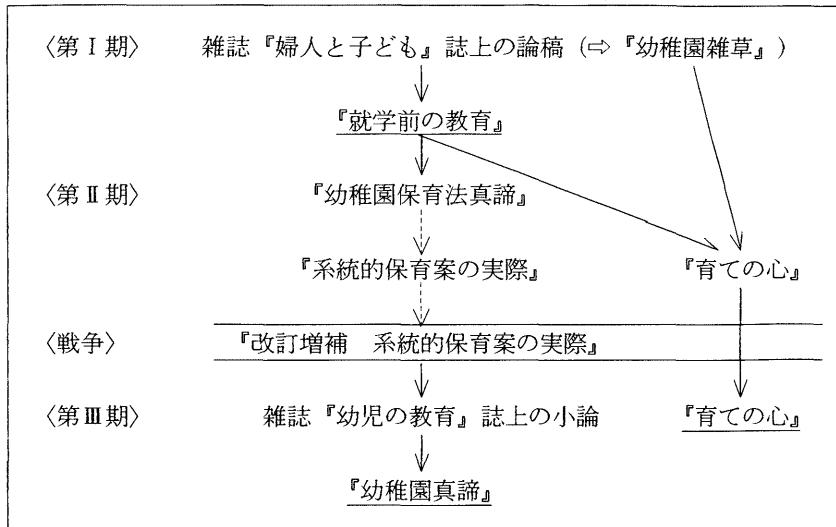
そして、倉橋は最後に自伝的な『子供讃歌』を著し、昭和三十年に没したということは皆様ご存知の通りです。

二 倉橋保育論の“真”から現代の保育を考える

第一期から第三期までの倉橋の保育論の変遷を簡単にまとめると〈図3〉のようになるのではないかと思います。矢印は考え方の流れを示していますが、特に↓は考え方が揺れ動いていることを表しています。

倉橋物三の保育論を全体的に眺めて見ると、第一期の『就学前の教育』に集約されている基本的な保育論（理

〈図 3〉



論) が全体を通す軸になっており、その基本軸を踏まえて保育の方法と実際のかかわりという二つの軸がでてきているのではないかと思います。決してそれそれが図式的に分かれているものではありませんが、子どもの生活に即した幼稚園教育の方法についての倉橋の考えを表したもののが『幼稚園真諦』であり、具体的な保育場面での一人一人の子どもに対する保育者の真情を記したもののが『育ての心』で、『就学前の教育』と『幼稚園真諦』(『幼稚園保育法真諦』ではなく) と『育ての心』が倉橋保育論の“真”ではないかと考えます。

「理論」と「方法」と「かかわり」という三つの軸で保育を考えていることが、倉橋保育論の最大の特徴の一つではないかと思います。「かかわり」という軸を視野に入れずに保育を語るということがしばしばあります、実践者にとって保育はかかわりそのものです。かわりだけでは保育は深まっていかず、理論や方法について研究していくことも不可欠です。しかし、私は実践者であり、実際の保育の場面での子どもと保育者とのか

かわりや幼児理解を抜きにして保育は語れないと考えていますので、私にとって特に『育ての心』が大事だと思っています。

現代の保育についての探究という点ではまだまだ不十分なのですが、倉橋の保育論を継承発展させている津守真先生の「発達を危機と考える」発達観や保育論を手がかりにし、子どもの行動を内的世界の表現と見ることによつて、調和的発達観では捉えきれなかつた子どもの経験の偏りの問題を解決する一つの考え方を示しました。実際に津守先生は愛育養護学校で「保育的関係」をつくった。実際の保育の場面での子どもの行為に對して保育者としてどのような行動をとるか、保育者が一つの行動を選びとる背景にはその子どもの行為をどう受け止めどう理解しているかという保育者の主体的な判断があるのだということ、そして保育はそのかかりの積み重ねなのではないかということを深く感じました。保育者としての未熟さを以前にも増して感じている現在ですが、保育の楽しみが広がり深まつたように思つています。

実践の場である福井大学教育学部附属幼稚園でも、今、

倉橋保育論に導かながら保育を問い合わせ始めたところであり、倉橋の“真”を継承しながら福井大学教育学部附属幼稚園の方法を保育者集団の話し合いの中から生み出していくとしているところです。

(福井大学教育学部附属幼稚園)

*

動物行動の研究から(2)

イルカとの出会い

柴坂 寿子

(お茶の水女子大学)

則竹 詳子

(鶴水造形センター)

リュック・ベッソン監督の映画、『グラン・ブルー』（一九八八年制作）をご覧になったことがあるだろうか？ 素潜りの限界に挑む二人の男の生きざまと友情

する対象である」とする長かった人間至上主義とともに、流れに対し、その見直しの動きが少しずつ出始めている。

を描いたこの映画の中で、イルカは「人間が究極的に求めるなにものかに向かって、人間を導く存在」として象徴的に描かれている。

人間と動物の関係の歴史の中で、動物は文化によりまた時代により人間から様々な扱いを受けてきた。「動物は人間より劣っているものであり、人間が利用

く、科学者たちからの動きでもある。例えば、心理学者、精神医学者、行動学者、獣医師などを中心とした「人と動物の絆の研究グループ」は、動物との交流が人間のパーソナリティの発達に及ぼす効果や、コンパニオン・アニマルが自閉症や精神病の共同治療者とし

て機能する事例を、数多く発表している。

こうした見直しがなされたようになった基盤には、人間が動物達に触れたときに「動物は人間より劣つてゐるもの、人間が利用する対象」という考えに当たはない何かを、人間が共通に体験するからではないだろうか。自然の中で動物たちに触れる機会を多くもつダイバーたちへの調査をもとに、特にイルカと出会ったとき、人間が何を感じ、どの様な影響を受けるのかを考えてみたい。

イルカと出会ったとき、イルカの種類や状況に応じて、ダイバーのとりうるふたつのふれ合いのパターンがある。ひとつは、ボートの上などからイルカの行動を見て楽しむ場合で、ここでは「イルカウォッチング」と呼んでおく。もうひとつは、マスク、スノーケル、フィンなどスキンダイビング用の道具を装着し、海に入つてイルカと一緒に泳いで楽しむ場合で、ここでは「ドルフィンスイム」と呼んでおく。

ハシナガイルカ類は水面上では華麗なジャンプを見せてくれるが、水中でははにかみやで人間とは遊んでくれない。それでハシナガイルカ類に出会つたときはイルカウォッチングになる。またバンドウイルカ類に出会つたとき、普通はドルフィンスイムが可能だが、子連れの時や移動中の時には神経質になつてるので、イルカウォッチングとなる。

調査は三つの部分から構成されている。第一はダイバーに対するアンケート調査で、これが主要な資料である。筆者のひとり（則竹）の所属するスクールダイビングサークルのメンバーを中心に、三十七名のダイバー（男性二十名、女性十七名）から回答を得た。年齢は十八～三十八歳の間である。主な質問は、イルカと出会つたときの第一声は何だつたか、そのときどの様な行動を取り、まだどの様な感想を持つたか、イルカの印象はどのようなものでどんなところからそう思つたのか、イルカと出会つたあと自分にどのような変化が現れたか、イルカと出会うことはどういうな

験で他のどのようなことに相当するか、などである。

質問にはイルカウォッキングの場合と、ドルフィンスイムの場合に分けて、それぞれ答えていただいた。

第二は、ダイバーの行動の観察である。小笠原において前述のダイビングサークルのメンバーがイルカと一緒に実際に出会った際、第一声は何か、どの様な行動を取るのか、表情はどうか、どの様な感想を述べるかなどをポイントに観察した。そのとき観察対象者の人数は二十八名（男性十六名、女性十二名）、年齢は十八～二十四歳であった。

第三は、小笠原でダイビング、イルカウォッキング、ドルフィンスイム、ホエールウォッキングなどのガイドをしている方達二名へのインタビューである。ガイドの方は二名とも五十歳代の男性である。質問はダイバーにアンケート調査した項目に準じた。

これら三つの資料をまとめ、イルカウォッキングとドルフィンスイムを比較した。結果の概略を示したものが次頁の表1である。

イルカウォッキングとドルフィンスイムとでは様々な相違があることが結果から示唆される。

第一の相違と考えられるのは、イルカが人間にとつてもつ役割である。先行研究から、コンパニオン・アニマルなどの動物が人間にとつてもつ役割は、①個人的な伴侶、②エンターテイナー、③マスコット、④生き物環境、の四つに大別されるといわれている。

イルカウォッキングでのイルカの役割とはどれに当たるのだろうか。表1に示されているように、イルカウォッキングでは、イルカにあつたときの第一声は「イルカだ」、「あつ」というように、目の前に起こっているそのまま声を声に出していることが多い、(①)。そしてボートの上で、大騒ぎをしながら(②)、大喜びして楽しんでいる(④)。観察を例にあげれば、イルカがボートのすぐ横や真下を通ると「きやーー！」「わーっ！」という大歎声が上がっていた。イルカがジャンプしたり、ボートの引き波にのってサーフィンをするかのように遊んでいると拍手が起つたり、歎

表1 イルカウォッキングとドルフィンスイムの比較

項目	イルカウォッキング	ドルフィンスイム
①イルカとの遭遇時の第一声	目の前に起こっているそのまま（「イルカだ！」）	無言（言葉にできない感動）よびかけ（「遊ぼうよ！」）話かけ（「ピーピー」）
②イルカとの遭遇時の行動	ボートの上で見る大騒ぎする	追いかける 近寄る一緒に遊ぶ 遊ぼうとする
③遭遇体験後の感想	抽象的（「すごい！」）	具体的（「イルカがここまで近寄ってくれた」）
④遭遇体験後の表情	大喜び 楽しんだ	笑顔 穏やか 満足感 達成感
⑤イルカの印象	かわいい	かわいい 人間に好意的人間に近い 自分に近い
⑥イルカの印象の理由	イルカの行動（ジャンプする姿など）	イルカの表情（特に目） 意思
⑦遭遇体験後の変化	特になし	イルカを人間と一緒に何かできるものと感じるようになった
⑧遭遇体験の記述	感動する（「ドキドキするもの」）	感動する人の心に働きかけ、安らぎを生む（「心が洗われる」）
⑨遭遇体験に相当する体験	感動的な体験（「虹を見る」「感動的な映画」）	大切な人との体験（「自分を待ってくれていた人と会う」）

声が一段と高くなつたりしていた。イルカを見た後のイルカの印象は、ジャンプする姿などを理由に、「かわいい」「遊び好き」などと捉えられている(⑤、⑥)。

こうしてみると、イルカウォッキングは、ダイバーからみて、水族館でのイルカのショーや自然の姿で自分の前に出現した様な感じではないだろうか。ダイバー達の行動からみても、ボートからイルカを見ているため、一步離れたところから観客として一方的に鑑賞し、拍手を送っているという感じがある。イルカウォッキングではイルカは人間にとつてエンターテイナーとしての役割を持つているのではないだろうか。

これはイルカウォッキングでイルカのもつ「エンターテイナー」としての役割から、当然のことなのかもしれない。ショーやロックコンサートなどでも、例えそれが感動的で楽しいものであっても、多くは人生観や人間性を変えるようなものではないのではないか。これと同じように、イルカウォッキングではイルカの動きを見て感動し、楽しくなるものの、そうした体験は一過性のようである。

ではドルフィンスイムではどうだろうか。まず第一のイルカの役割について考えてみよう。イルカに出会ったときの第一声は、感動の余り声にならないという場合が一番多いものの、「遊ぼうよ」と呼びかけたり、「ピーピー」と話しかけたりしていることも多い(①)。またダイバーはイルカの後を追い、一緒に遊ぶは感動的な体験ではあるが(⑧、⑨)、その後、人間に何か変化をもたらすものではない(⑦)。まして人格形成や人生の大転換というような変化はもたらしていないようだ。

人、愛する人、気の合う友達などと過ごすこと」「自

分を待つていてくれた人に会うこと」など、自分にとつて大切な人の体験があげられることが多かったた(⑨)。そして実際はイルカはどの人とも遊んでいるようなのだが、それぞれのダイバーは「自分にだけイルカが寄つてきてくれた、遊んでくれた」と認識していることが多いようだ。

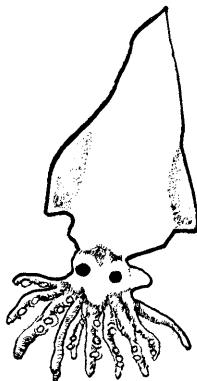
こうした結果から考へると、ドルフィンスイムでのイルカの役割は「個人的な伴侶」にあたるのではない

だろうか。ドルフィンスイムでは、イルカは人間と

ずつといつしょに生活して伴侶関係を持つてゐるわけではない。また人間は繰り返し同じ個体に会えているわけでもない。ここは家庭で飼われているコンパニオン・アニマルが人間と持つ個人的な伴侶関係とは大きく異なる。しかしドルフィンスイムで人間が感じ取つているものを見ると、イルカは人間に必要な人間関係の体験の代わりになつたり、伴侶関係で味わうような体験を提供したりしてゐるようと思える。

第二に、ドルフィンスイムが人間に引き起こすものはどうだろうか。ドルフィンスイムは「心が洗われる」「純粹によい気分になる」「優しい気持ちになる」「大都市での生活を忘れて、無邪気な気持ちになれる」「心を和ませてくれる」など、心に働きかけ、安らぎを与えてくれる体験のようだ(⑧)。

この安らぎの効果はどの様にして生まれるのだろうか。ドルフィンスイムをするときにはダイバーはイルカの印象を目から受けていることが多く(⑥)、イルカに呼びかけたり話しかけたりする(①)。そしてイ



ルカとの交流を期待し（②）、笑顔や穏やかな表情を見せる（④）。これらの行動は、一般に親密な関係を持った対象に向けられる行動である。

さらにドルフィンスイムでは、ダイバーは、イルカはかわいいだけではなく、人間に近く、好意的なものという印象を受け（⑤）、表情や意思があるという認識を持っている（⑥）。そしてドルフィンスイム後には、イルカを人間と一緒に何かができるものと考えるようになっている（⑦）。こうしたことから、イルカに人間との類似性を感じている様子が窺える。

哺乳動物の鳴き声、しぐさの基本的な部分は、種を超えて共通するものがある。それゆえに人間がイルカに意思や感情を感じ取ること、そこからイルカを自分に近いもの、理解できるものとして捉えることは、ある種当然のことかもしない。

またひとりのガイドの方は「いまなお維持されてい

るイルカの絆を大切にした関係に触れ、本来あるべき生き物の姿を見た」と話し、あるダイバーは「誰に対

しても変わらぬ接し方をするイルカに忠実さを感じ、忘れていたものを取り戻した」と語っていた。ここからは、人間はイルカの変わらぬ姿、不变性を感じ取っているのだろうと考えられる。

ドルフィンスイムで人間はイルカに親密な感情を持ち、イルカに人間との類似性を感じ、人間に比べて変わりにくいイルカの生のあり方に気づく。人間がイルカと泳いで安らぎを得るのには、このような認識が基盤になっているのかもしれない。

結果を通じて述べてきたような、イルカウォッチングとドルフィンスイムの違いはいったい何を示しているのだろうか。それは人間が動物との関わりの中で得るのは、関わりの対象となる動物へのアプローチの仕方、認識の仕方によって大きく変わってくるということではないだろうか。

ボートに乗り、イルカから距離を置き、眺めると、イルカは人間を楽しませてくれるエンターテイ

ナーである。人間は大喜びはするものの、その感動は

過ぎ去っていくものである。これに対してイル

カの住む海の中に自分も入って行き、イルカと同じよ

うに海に身を委ね、水という媒体を通してイルカを肌

で感じるとき、そして間近でイルカと目を合わせ、そ

の感情や意思を読み取り、一緒に泳ぐとき、イルカは

自分と対等で、大切な個人的存在となる。こうした体

験は人間の心に安らぎを与え、深く心に残つていくよ

うである。

イルカが人にもたらすものについてここまで語つて

きた。今後こうした効果を求めて、人間と動物の交流

がもっと意識的に行われるようになるかも知れない。

しかし、動物との交流のもたらす人間への効果を最大

限に引き出すことに躍起になつていくことは、「動物

は人間より劣つたもの、人間のために利用するもの」

という考え方へ逆戻りすることになりかねないのではないか。本来こうした考えのもとでは、動物と人間との

本当の交流もその効果もありえないはずだ。

私達が動物達との交流の中で真に求めているのは、

部分的に取り出された効果なのではなく、動物達が彼らの本来の環境で生き生きと生きる姿そのものであ

り、私達もまた一個の生物として彼らとその場で生の

喜びを共有し、交換していく体験 자체なのではないだ

ろうか。

参考文献

キャッチャー・A・H、ベック・A・M『コンバニオン・

アニマル』東京 誠信書房 一九九四

則竹詳子「自然と動物が人間に及ぼす効果—ダイバーへの

調査から—」平成六年度お茶の水女子大学家政学部家庭

経営学科卒業論文 一九九四

夏の夜話

近藤 雅之

夏がくると夏の夜空が話題になるのはなぜだろう。冬になって冬の星なんてきかれることは滅多にない。実のところは日本では、秋深くから冬いっぽいが星を見る季節である。天文台では申し込みで望遠鏡の時間を分けるのだが、観測所によつては十月から三月までしか割り当たらない位である。

寺田寅彦先生に涼み台の隨筆があり、教科書にも

出ていた。昔は暑さ凌ぎに日の落ちたあと縁台で団扇片手に話に興じた。そういう時に星も見た。寒天に星を眺めるのは病の昂じた人だけである。こういふ様子はエアコンがあえて消えただろう。大体夏の夜は短くて、星の見え始める時刻がおそく、子どもむきではないのである。

東京の空では星がよく見えなくなつてしまつて長

い。東京に限らない、夜空を照らす灯りの数は全国にふえている。光害を減らして夜空の自然をとり戻そうという標語は、痴漢に注意とか街を明るくとかの看板に負けそうである。それに海岸でも泳ぐのはプールというのと似て、結構星の見える所にプラネットリウムがあつたりする。プラネタリウムや民衆天文台の普及は驚くほどである。

さて子どもは、プラネタリウムで何を見るのだろう。昔の縁台では大人達は熱心な子どもの質問にすぐ追いつかなくなつた。その点、プラネタリウムなら安心である。昔のプラネタリウムは子どもに星の名をいわせたりして虚栄心をくすぐつた。この頃はずつと高級なシナリオで進行しているから、そんなことをしている時間はないだろう。スペクタキュラーな現代、プラネタリウムの上演効果は圧倒的で素朴な疑問など消しとんでもない。子どもたちの期待するものは知的好奇心といえるが、それに答

えるという意味で、今が昔に勝ると簡単にいえるかどうかわからない。情報の量は較べ物にならないが、昔は好奇心に素直に対していたのに、今は子どもに限らない層の芸術的感興をねらっているようである。

子どもに一時期天文好きが多いのは確かである。プラネタリウムに通つたり、本を読んだり、望遠鏡をねだつたりを経過して、かなりの人は別の対象に興味を移してゆく。好奇心の対象とすれば当然のことである。昆虫採集とか切手とか、今はゲームも計算機もある。星好きは一過性の趣味のひとつであることが多い。そこを乗り越えて天文に踏み停つた人は、天文ファンになつて長くつきあうことになる。

天文の雑誌というものが何冊も出たのは、戦争後のことである。天文ファンの数は何倍も増えている。綺麗な写真を楽しむ人も、彗星を捜す人も、計算を喜んでしている人もいる。大学で天文学を専攻する人

には逆に幼時からの天文好きでない人もいる。数学が好きで理科に入った、製図が嫌で理学部天文にきたという類や、物理に入つたけどモダンな天文の本を読んで宇宙の問題を考えたくなったという類、うつかりすると北極星もわからない人もいる。人工衛星があがり、物理学者が赤外線やX線の観測を始めてからそういう志望者が増えた。

天文ファンもいろいろである。熱心に晴夜を求めて遠くまで出かける人、専門書をあさり歩く人、鏡を磨く人は昔からいたが、パソコンやエレクトロニクスの専門家も当然いる。専門の実力を天文に生かしている人は、物理で赤外線やX線の技術を修得して天文をやる人と紙一重である。それで昔のプロとかアマの境は相当曖昧になってきている。研究結果だけが問題だといえどそれで当然である。

さて単純素朴に星空を見るという話に戻つてみ

る。一番星見つけたというような情景が今あるかどうかわからないが、歴史的にいって日本で星空への関心が大きかったとはあまり思えない。例えば天界の様子を語った文学は新村出先生の南蛮更紗以来、星はすばるや、建礼門院右京太夫よりあまり増えないようである。星の名こそ本にした人もあるが、星座となると、中国か西洋となる。星座は天文学の实用面で発達してきたので、自分で暦を作らなかつた日本では、暦と組んだ輸入品が普及、それも星座の方は暦のように民間に広まることもなかつた。空を見ることは遊び以上のものなのである。世界にはこのように星への関心の低い文明があるようで、太陽暦を作つたエジプトも、ナイル氾濫を知るためシリウス（犬大座^{ブルブ}α星）を観測したほかは星座など伝わっていないようである。

いろいろ並べてみると子どもの知的また感性的教育にとって星空の鑑賞が必須なものだなどとも思

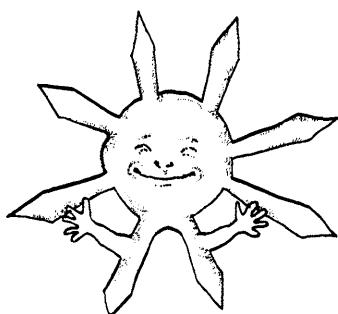
えない。たまたま綺麗な星空眺める機会があれば大人もいつしょに美しいと思えばよい。それをどのような機縁に転ずるかは人による。シャーロック・ホームズだって美しいと位は思うのだろう。

ところで夏の夜空というと七夕、織姫と彦星の話など今時の子どもは聞くとも思えない。しかし、七月七日はともかく、夏中頭の上に明るく見えているのは織姫である琴座^a星、西洋の名をヴェガといふ最初に距離の測られた星のひとつである。赤道より北の星では一番明るくて目につく。この星が近年また話題になったのは赤外線を測つたら星のまわりにダストの塊があることがわかったからで、これは原始惑星系が出来るのはないかと思われている。

ヴェガの東南に銀河をさして牛^bアルタイル、わし座の星がある。東すこし北の銀河のなかに白鳥座^c星のデネブがある。アルタイルの方にのびた三角形だが明るい星ばかりで見つけ易い。デネブ

は白鳥のおしりで、首の先はちょうどヴェガとアルタイルの中間にの方にのばし、羽は両側に拡げている。大体は東に向いて頭上に近いのがヴェガ、それから東に三角形がある。

天の川はこのあたりから南にとくとくと流れ落ちてゆく。よく天の川の見える夜ならば南にゆくに



れ、銀河の幅が広がり、明るくなっているのがわかる。一番明るいのが、射手座、さそり座、へびつかい座の境界あたりである。黄道十二星座といふけれど、現行の星座の境界線で、いと、黄道はさそり座の部分は少なくて、へびつかい座の方が多い。それなのにへびつかいは疎外されてしまった。もちろん占星術の方でも天蝎宮、人馬宮、魔蝎宮でへびつかいは入っていない。そこらがいい加減なのは中国の二十八宿も同様で、黄道を北へ南へよろけて配置されている。たとえば昴宿（すばる）は黄道に近いけれど、参宿はオリオンの三つ星だから赤道上で、黄道とは20度以上離れているという塩梅である。宿には当然ある程度の拡がりがあるので、参から黄道までにはほかの名の星がいっぱいあるのである。

オリオンが見える時はさそりは見えない。その逆ももちろんのこと。中国では“人生相見ざることやもすれば參と商の如し”などとうたわれる。商と

いうのは、さそり座のα星アンタレス（中国名を大火）のあたり心宿の古名である。ANTARESは火星（ARES）に対抗するものの意、その通り赤い超巨星である。両側に三等星がついてしなった天秤棒のようで商となにかで読んだ気がする。左伝では、仲の悪い兄弟を離れて住ませた、その一方が商丘という所でこの星を祀ったのでそれが星の名になつた、他方が参だというのである。織姫が天頂にかかる頃にはもう西へ行きかけている。“寒蟬敗柳になき大火西に向かいて流るる”といわれる形である。

ところでこの辺にはもうひとつ有名な中国詩がある。詩といつても賦といわれるが、“しばらくありて月は東山の上に出で斗牛の間を徘徊す”という、斗はすなわち射手座の南斗六星、牛は牛宿で山羊座の尾のあたりである。南斗六星は北斗七星ほど明るくも大きくもないが、口を南に伏せて柄を西にのば

した形はわかりやすい。

このあたり銀河は明暗交つた複雑な流れを作つてゐる。斗宿と心宿の真中辺が、銀河系の中心である。光ではレンズの面内を見る形で、厚板ガラスを面内の端面から覗くと青黒くて先が見えないと同じで、見透しが効かない。遠赤外や銀波ではずっと見透しがよく余り大きくなく、活動的な中心部が見える。

明るいカメラでこの辺を含めて広い写真をとると、天の川というよりは、真横から見た渦巻銀河のように見えて驚かされる。銀河系のような渦巻銀河では平面に広い渦巻きの中心部には球状のバルジと呼ばれる部分がある。うまくとった写真では銀河バルジが立派にうつり、橿田銀河のように見えさえする。銀河はこのふたつの種類に大別ができるのだが、なぜそのふたつしかないのか、どういう風に生まれて育つたかはまだわかつていない。全然違う物のよ

うなのが、渦巻きの中心に橿円銀河的なものがあるとすると、これは誕生の秘密に關係するかも知れない。大体いずれの銀河でも中心には重力崩壊したブラックホールがあり、そのまわりでの重力エネルギーの解放が銀河活動の源泉らしいと思われるようになつてゐる。

一晩中観測を続けられた朝の楽しいことは格別である。疲れも実に心地よい。そして鳥の声。夜半にも冬は水鶴とか、夏は慈悲心鳥にききほれることもあるが、暗いうちの虎つぐみに始まる数々の声には、眠りにつく前にやすらぎと翌晩への希望を与えてくれるものがある。多分早起きして聞くのよりもっと良いのだろうと思つてゐる。

(天文学研究者)

音楽リズム・オン・ステージに 参加して

～保育者の自己変革を目指して～

小崎 祥子

毎年、夏の大半を新現代幼児教育研究会のリズム研修「オン・ステージ」の練習に当てる様になつて何年になるでしょう。今年もまた暑い毎日を練習に明け暮れる日々が続くことでしょう。

「現代の様にめまぐるしい変化に富んだ社会の中に生まれ育つておられるお子さん達を前にして、私共教師は常に勉強していかなければ……」とは、この研究会の指導者でありまた私の恩師であられる堀合文子先生のお話の中にいつも出てくる言葉です。

私の「オン・ステージ」との出会いは、第一回の戸倉ハル先生の追悼会の舞台を拝見させて頂いた時に逆のぼりますが、この時は指導なさつていらした堀合先生の熱意と、それに一生懸命に応えようとしている先生方の熱意がひしひしと伝わってきて、大変感激したことを覚えてます。その後、「ご一緒に……」とお誘い頂いたのですが、実行に移せない

まま第三回の「オン・ステージ」を見せて頂き、そこで私は大変なショックを受けました。というのも、一回目の時と三回目の時の進歩を目のあたりにしたからです。私は正直言つて音楽は好きですが、動きのリズムは得意ではありませんので逃げていたのですが、手をこまねいている一年と出来ないなりにも努力を重ねて過ごす一年の違いを知らされた会でした。理屈は分かっていても動けなくては何にもならないと考えました。何気ない教師の動き、リズム、毎日一緒に生活する教師の身のこなしは、お子さん達にとって最大の環境であるはずです。とすれば美しい動きを身につけておかなければなりません。

当時、主婦専業で子育て真っ最中の私にとって、練習に参加することは困難な事でしたが、「常に勉強しなければ……」との励ましの言葉と、将来復職の機会があつた時の為に少しでもブランクを感じな

い様にしたいとの気持ちから「お子さんは連れていらっしゃい」とのご好意をそのまま受けて、当時二歳半だった息子の手を引いて子連れで勉強に通い始めたのです。三年程は息子のことで研究会の先生方にも大変ご迷惑をお掛けしたのですが、皆様がとても温かく迎えて下さったので励まされてなんとか続けることが出来ました。その日から今日まで、その頃お元気だった小林つやえ先生がよくおっしゃっていらした「継続は力なり」の言葉を信じて続けています。現在は息子も高校生になり、私も復職して八年目になりますが、日々の生活に大変に役立つております。続けていて良かったと思つております。

さて、「オン・ステージ」の舞台での動きは、歩

く、走る、飛ぶ等の基本的な動きに始まり、作品の発表に移行するのです。作品では昔の動きと今の動きとの比較もしたり、歌や楽器やリズム劇をしたりと夏の集中練習の成果のみでなく、毎月の月例研修

会での積み重ねの発表となるのです。舞台での動きはそれ自体が大切というよりも、発表すると言う緊張感で集中して学ぶ事が出来るという点において大切だと思っています。

実際には毎回の練習が大切なのです。まず、基本動作から入ります。背筋を伸ばして姿勢を正し、体重を移動させながら歩くことから始まります。いつも

も何気なく歩いているのですが、正しく美しく歩こ

うと意識すると、なぜか歩けなくなってしまうのです。堀合先生のおっしゃる様に歩こうとすればするほどギクシャクした動きになってしまるのは、正しく美しい動きが、身に着いていない証拠です。歩く事ひとつを取り上げてもこうなるという事は全ての動きにも共通して言えることで、堀合先生の真似をしているつもりでも、実際には出来ていない事が多いのです。繰り返し繰り返し練習しても、なかなか思

うように動けません。しかし、基本の動きはとても大切で、日々の保育の中でも常に基礎になっていると思います。そして、歩く、走る、飛ぶの三つの基礎を元に、ステップ、ホップ、ギャロップ、ワルツ等いろいろ応用していきます。応用する事によつて、日常の保育者の動きにも少しづつ浸透して



いくのです。

この基本の大切さについて堀合先生は、ある文章の中で次の様に書いていらっしゃいます。「何事に基本は大切なことは言うまでもありません。ゆるやかな動きでも早い動きでもすべて基本から来ております。幼児と共に生活する私共は特に大切な事と信じます。一緒におどつたりするだけでなく日常の保育自体がリズムであり基本の動きがものを言います。それも表面だけ、形だけのリズムでなく体の中に動いているリズミカルな動きが保育を作りいきいきとさせ、幼児を指導するので頭の働くせ方もその大きな位置をします。基本は一〇年やつてもくりかえしする事が大切で表面にはみえなくても幼児の心の中に浸透してゆくのです」。

次に作品に入りますが、これは昔からの振りを伝えていくものと自由表現とがあります。中でも自由表現の難しさは最たるものがあります。動物の表現

を例に取ってみても、それぞれの特徴を捉えてその物に成り切って動く事はとても難しいことです。自分としては精一杯その物らしく動いてはみるのですが、なかなかうまくいかずに、すずめがカラスや蜂の様になってしまったり、蝶々が飛行機や鳩に似ていたりする事も度々あるのです。これは技術的な未熟さに加えてその物に成り切っていない、即ち無心になって邪心を取り除き、心からその物に成り切つていいないということなのです。心を入れる事と、その物に成り切って動く事、子どもの心で子どももらう表現する事の大切さを繰り返し繰り返し教えられます。何回繰り返しても思う様に出来ないことが多く、悲しくなつたり辞めたくなつたりする事も有りますが、辞めてしまつたら何にもならないと思い直してまた始めからやり直す事の繰り返しです。何年やつても進歩が少なく悩みの種ですが、今後ますます努力して少しでも進歩するように頑張りたいと



▲舞台で「オン・ステージ」の実技指導

思っています。今一番の課題は気持ちを入れて表現すること、子どもに成り切って表現する事で、一番難しい事です。どうしても自分が出てしまったり恥ずかしさで変な動きになってしまったりするのでその度ごとに反省させられます。自分ではその物に成っているつもりでも相手にそれが通じないという事はまだ力不足という事です。

表現に関しては、こう書いていらっしゃいます。
「表現は保育者にとっても大切でむずかしいもの。児に接するにもその表現の仕方で児童の心に通じるものであり特に現代はその点児童と教師のやりとりが児童教育になりますので大変です。」

フォークダンスや民謡などは、保育者の身体を鍛えるのに大変役に立つ材料だと思います。保育者はいろいろな身体の使い方をする事が必要ですが、その身体の使い方の勉強にとてもプラスになると思います。また楽器遊びもお子さんがいつでも出来る様

な材料で、とてもやさしい打ち方で、楽しめる例を出してくださいます。時には楽器も手作りで作ってみたり、身近な道具を使って音を出してみたりしていろいろ工夫して研究したりいたします。

劇遊びでは、それぞれの役に成り切ってお話を表現していく訳です。それぞれの役に合った動きはもとより小道具の作り方や、衣装の効果的な使い方まで指導してくださいます。お面ひとつにしても、描き方・色のぬりかた・切り方・ベルトの付け方にいたるまで細かく教えていただき、普段の手抜きの保育を反省させられる事もあります。小道具や大道具を作る時は、まさに製作の研究会になるのです。こうして数多くの研究生と交わりながら単に動きの勉強のみでなく、総合的に学ぶ事が出来、更に人と人との和も含めていろいろな神経の使い方に至るまで勉強させていただいています。これらは全て保育をする上で欠かせない大切な事ばかりです。

「オン・ステージ」で使う曲や歌等の材料は、ほとんど子どもの材料を使っていますが、これをこのまま子どもにおろして教えたりやらせたりする為の見本というのではなく、「オン・ステージ」はあくまでも教師自身の勉強の場であり、修業の場であると私は思っています。幼児教育にとって最も大切な環境の一つである教師の立ち居振る舞いや身のこなしで、リズミカルな動き、発声、思いやり、細かい配慮、等々……を最大限に駆使して四方八方に神経を張り巡らし、子ども達がより良い成長をする為のお手伝いが出来るよう、教師自身が常に勉強して自分を高めつつ、自己変革していくなければならないと思います。

此の研究会の大きな特徴は、身分を越え年齢を越えて若い方も年上の方も一緒になって同じレベルで参加すると言うところでしょうか。そしてその上とても熱心で気持ちの優しい方々が多いのも他の研究

会に類を見ない様に思います。お互いに励まし合い高めあつたり、時には良き相談相手になつたりして、かけがえのない仲間として共に成長していく同朋であると言えるでしょう。この考え方には賛同して参加者が増え、仲間の輪がもつともっと広がつていくことを願いつつペンを置きたいと思います。

“子どもは 瞬間 瞬間 に生きて います。

保育者は 常に 自分の機能を動かし
お子さんの生活に あらゆる面で
応えてあげなければ なりません。”

(堀合先生語録より)

*堀合先生の文章は第十回オン・ステージのプログラムより引用しました。

(共立女子学園大日坂幼稚園)

平成7年度 新現代幼児教育研究会主催

夏期講習会及び研究発表会（第16回オン・ステージ）

日 時 1995年8月20日（日）

午前10時～12時 講演（講師未定）

午後1時～4時 音楽リズム・オン・ステージ

会 場 十文字学園講堂

連絡先 十文字幼稚園 堀合文子 T E L 03-3918-1668

*上記オン・ステージに参加ご希望の方は8月10日～20日まで
講習いたしますので、どなたでもどうぞ！お待ちしています。



ある日の育児日記から

佐藤 和代

有はもうすぐ三歳。この「ころ突然、形のある絵を描くようになりました。これが楽しい。見るたび笑ってしまいます。

(55)

有が、大きなマルを描きます。その中に「おめめ」「おくち」と言いながらてんを描いていきます。「おとうさん」と言ってめがねを加えます。「立ってるの」と言いながら、顔の下にぼうを一本。…そんなふうに絵ができるのです。

以前、家庭科の教師をしている友人に、授業で使うから子どもの絵を貸してと頼まれて、圭の描いた絵を年齢順に何枚か選んで渡したことがあります。そのときなぜか、こうやって見るのってつまらないなと思いまして。その疑問が、有の絵を見ていたら解けたような気がしました。描いているときの言葉、表情、手の動き。全部ひつくるめての「絵」なんだ!で、だいたい、「立てるの」とぼうを一本描いて体のできあがり…なんて、大人にはできない技。「ないでいる」と言って目の下にもぼうを二本。ついでに鼻の下にも描いて「はなみず」。すごいな。あ。私は前、「子どもの絵にはかなわない」なんて言葉はひどく陳腐だと思っていましたけど、最近すっかり宗旨替えです。

ます。そのときなぜか、こうやって見るのってつまらないなと思いまして。その疑問が、有の絵を見てたら解けたような気がしました。描いているときの言葉、表情、手の動き。全部ひつくるめての「絵」なんだ!で、だいたい、「立てるの」とぼうを一本描いて体のできあがり…なんて、大人にはできない技。「ないでいる」と言って目の下にもぼうを二本。

ついでに鼻の下にも描いて「はなみず」。すごいな。あ。私は前、「子どもの絵にはかなわない」なんて言葉はひどく陳腐だと思っていましたけど、最近すっかり宗旨替えです。



これが有の描いたおとうさんです。

OMEП(世界幼児保育・教育機構)

世界大会開催における

畠中 徳子

はじめに

来る八月一日から四日まで、パシフィコ横浜で、アジアで初めてのOMEП世界大会が開催される。この世界大会が間近に迫った現在、日本の幼児保育・教育関係者が総力をあげてこの大会を成功させるために日夜努力を

幼児教育の研究者、保育者養成にかかる大学の教員等多くのOMEПの個人会員をはじめ、保育所、幼稚園、その他の幼児保育・教育の団体や組織の代表が一堂に会して、これほど熱心に討議したことがかつてあつただろうか。

奇しくも今年一九九五年は、第二次世界大戦が終了して、五十年目にあたる。OMEПは、第二次世界大戦後長のもと、保育所、幼稚園の現場で働く保育者、園長、

のヨーロッパで戦争の被害を蒙った多くの子ども、とりわけ就学前の子どもたちの問題に心を痛めた人々が力を合わせ、この問題に立ち向かおうとしてつくられた国際組織である。

OMEПは英國のレディ・アレン、スウェーデンのアルバ・ミュルダールらによって、一九四八年に創立された。創立時にはアンリ・ワロンなども参加している。OMEПは創立当初からユネスコと強いつながりがあり、ユネスコが就学前の子どもをカバーできないところから、ユネスコのNGOとして就学前の子どもの問題に取り組んできた。第一回の創立大会がプラハで開かれて以来、本年の第二十一回大会に至るまで一貫して子どもの基本的な権利にかかるテーマをかかげ、世界の幼児保育・教育に携わる人々が知恵を出し合っている。一九八九年国連で成立した「子どもの権利に関する条約」についても、その成立の過程でOMEПは国連に対し様々な提言を行い、条約の成立にむけて運動をしてきた。このようにOMEПは常に世界の子ども、特に乳幼児の人

権を守ることおよび保育・教育の質の改善を目指して、保育者、保育者養成に携わる人、研究者、行政官等が対等な立場で一体となり、実践し、研究し、運動を進める個人も団体もふくめた組織である。

日本は、一九六八年にOMEПに正式に加入し、日本委員会には現在、莊司雅子名誉会長、津守真会長の下、個人会員の他、日本保育学会、全日本私立幼稚園連合会、全国国公立幼稚園長会、全国私立保育園連盟、全国社会福祉協議会・全国保育協議会、日本保育協会、日本私立短期大学協会保育科研究委員会、全国保母養成協議会、全国幼稚園教育研究協議会、全国国立大学付属学校連盟幼稚園部会、キリスト教保育連盟、日本仏教保育協会、東京都私立幼稚園連合会、東京都神社保育団体連合会、東京幼児教育協議会、保育研究所、幼少兒国際教育交流協会、幼少年教育研究所、以上十八団体が加盟している。また、今回の世界大会が神奈川県・横浜市で開催されることから、地元の幼稚園、保育所、養成校等の団体の協力を得て世界大会の運営にあたっている。

世界大会のテーマについて

OME P日本委員会は第二十一回世界大会のテーマを

『いま、人間を育てる—子ども時代の充実に向けて—』

に決定した。このテーマについて、OME Pのパンフレットに次のように解説している。

「人間性を脅かす現代の環境にあって、この課題にいかに挑戦するかは、幼児保育・教育の中心課題です。子どもたちひとり、ひとりのおかれている環境は、国により、また個々の家庭により、多様に異なっています。しかし子どもの子どもも人間として、育てることに専念する大人を必要としていることに変わりがありません。

社会がますます複雑化し、環境の悪化が進んでいる現在、私たちは幼い子どもたちのために働く保育者、また関連する専門職として、子どもたちが本当に必要としているニーズに応える仕事と責任を問い合わせることが求められています。」

さらにテーマを三本の柱に分け、またその柱にそって、分科会（＊）を設けている。

① 現代の環境と子ども

「いま」とは、現代の社会の環境のあり方を意味する。

* 平和を生み出す文化（平和教育） * 戰争・貧困・飢餓と子ども * 情報化社会と子ども * 人間性の育ちと自然 * 変容する家族と子ども * 多文化社会と子ども

* 人間らしい暮らしと社会政策 * エイズと子ども

② 子ども時代の充実にむけて

「人間を」—豊かな人間性が育つには、ひとりひとりの子どもが、子ども時代を充実して生きることが必要であり、そのためには子どもの権利の内実を捉え直さなければならぬ。

* 子どもの権利 * 子どもの発達 * 子どもの栄養と健康 * 子どもの権利としての遊び * 自由を得るための言葉と識字 * 子どもへの虐待 * 特別な配慮を必要とする子どもの保育

③ 乳幼児保育・教育の質の向上

「育てる」—この営みの質を豊かに。保育・教育の内容・方法を改善するあり方をさぐる。

*子どもと大人の関係 *子育て文化 *創造的学習としての遊び *カリキュラムと指導法 *人間の精神の輝きを育てる美術・音楽・文学 *保育者、その他の専門家・準専門家の養成 *子育て支援の施策・行政 *親と保育者・専門家の協力

プログラムの主なものについて

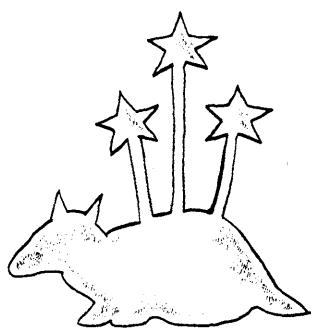
プログラムはテーマにそつて、分科会が作られるが、ハイライトとしては基調講演、講演、シンポジウム、世界で特に戦争などにより子どもたちが被害をうけている地域からの緊急報告等がある。これらは同時通訳が用意されている。(敬称略)

〈基調講演〉

☆パウロ・フレイレ (ブラジル、サンパウロ・カトリック大学教授)

世界的に著名な教育思想家で識字教育の実践者。一九五〇年代から六〇年代にかけて、ブラジルで成人の識字教育にとりくみ、世界的に注目をあびるが、六四年の軍

事クーデターで投獄され、その後亡命し、チリ、ギニア、モザンビック、アンゴラ等で識字運動に従事。その後、ブラジルへの帰国が許される。フレイレの識字とは単に文字を獲得することではなく、人が、人・物・世界



と主体的にかかわって生きることを意味する。しかし現代の学校教育はともすると単なる文字文化の伝達と普及に陥っており、彼のいう銀行型の教育になつていて。生徒の頭は空の金庫のようなものであり、それを教師が沢山の知識で満たす。一方、対話を重視する教育は教師と生徒は共に現実の世界に向き合い、課題を発見し、探究する。文化はこのようないくつかのうとに創造されていく。

フレイレの教育思想は識字率の低い第三世界に大きな影響を与えていたが、高度な情報社会に生きている私たちにとっても教育への根源的な問いかけを迫られるであろう。著書『被抑圧者の教育学』『伝達か対話か』『自由のための文化行動』(いずれも亜紀書房)

☆ヌーリア・ルマウーン(アルジェリア、オラン大学教授、社会・文化人類学研究センター所長)

イスラム圏の家族・社会研究者。講演のテーマは「アルジェリアにおける遊びの空間としての通りと子ども」。アルジェリアの子どもたちが大勢通りに出ているのは何故か。禁止事項や体罰の多い家庭から抜け出して

「ザンカ」と呼ばれる通りを遊びと自由の空間として自分たちのものとしてしまうためなのである。イスラム文化圏の子どもと生活と遊びの専門的な研究報告はOME Pでも初めてである。

☆ステファン・ルイス(カナダ、元カナダ国連大使、現在ユニセフ特別代表)

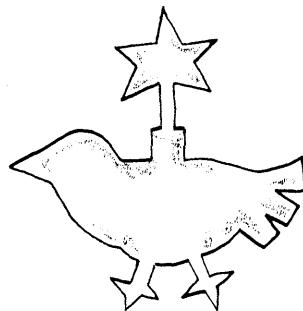
世界の子どもたち、特に発展途上国の子どもたちの権利とニーズの代弁者として世界的に活躍している。国連ガリ事務総長の信頼が厚く、九月に北京で開かれる「国連婦人会議」の特別顧問として助言する予定である。

〈シンポジウム〉

☆「児童保育・教育の質とカリキュラム」(企画者:A

・カーティス)

幼児保育・教育の量から質への転換は、先進国に共通する課題である。この課題に取り組んでいる国々の代表が自らの実践を報告する。企画者はヨーロッパ担当副総裁であり、OME Pの機関誌の編集長でECの保育問題の指導者として活躍している。



乳幼児をもつ親たちをどのように支援するか、特に行政の支援策は何か、世界の保育行政担当者の取り組みの報告等がある。企画者はOMEPEの総裁で、カナダ・ケベック州の教育省の行政官である。日本でも保育の支援策をめぐり、様々な論議が起こっている今日、支援のあり方が提起される。

☆「アジアの子どもたちは、いま」（企画者：土山牧善）

世界の人口の半数を占めるアジアは、今、目覚ましい経済発展を遂げようとしている。経済、社会が変化するなかで、子どもはどのような状況におかれているのか？アジアで初めて開かれるOMEPE世界大会であり、アジアの保育問題の理解を深める良い機会である。企画者はアジア・太平洋地域担当副総裁。

☆「子どもにとって二十世紀とは？」（企画者：OMEPEデンマーク委員会）

女性の社会進出に伴う働く母親の増加は世界的な傾向である。子育てをめぐる現代の環境の変化に対応して、

（ピノー）

「二十世紀は子どもの世紀」で幕開けしてから「子どもの権利条約」まで、今世紀が子どもにとってどんな時代

であったのか。この真摯な検討と反省の上に立つてはじめて、来るべき二十一世紀が展望できる。エレン・ケイに立ち返り、また、今日の子どもの問題を検証しつゝ、二十一世紀にむけて提言する。このシンポジウムは次回二十二回世界大会を主催する北欧五か国を代表して、デノマーク委員会が企画し、次回にも引き継がれる。

〈緊急報告、講演〉

緊急報告：世界各地で起つてゐる民族紛争、戦争、飢餓、貧困等で脅かされている子どもたちの問題について、実際それらの問題の対処にあたつている人々の報告。コロンビアのパードレ・ザビエル・ニコロはコロンビアのストリート・チルドレンと関わつて画期的な仕事をしている。北アイルランドから、B・ルディ。国連難民高等弁務官の緒方貞子（交渉中）他。

講演：世界の幼児保育・教育、関連領域での専門家による講演。日本保育学会会長の岡田正章が日本の保育・幼児教育を世界からの参加者に紹介する。またネパール

の僻地で結核対策等の公衆衛生に力を尽くした岩村昇の

講演がある。更に、OMEPI世界総裁で日本とは縁の深いマドレーヌ・グタール女史は、今年の国際寛容年を保育の観点から解説し、OMEPI前世界総裁エバ・バルケ女史は、遊びについて語る。

〈展示・行事について〉

☆展示：子どもの育ちを祝う世界の伝承儀礼と祭り等各国に呼びかけて、写真や絵など視覚的に構成する。

☆VTRショウ：分科会と平行して、世界各国から提供されるビデオの上映。

☆アジア・太平洋子ども歳時記：アジア・太平洋地域の伝承されたわらべうたやお話、歌遊び、現代の創作音楽等を各参加国に呼びかけて披露してもらう。

☆インターナショナル・バザール：OMEPIの各委員会が持ち寄る手芸品、物産等を販売して、OMEPIの基金にする催し。

☆施設見学：横浜、神奈川地区の幼稚園、保育所等の施設の見学。（有料）

☆インターナショナルの夕べ（懇親会 有料）：八月三

日の夜、横浜港の氷川丸の船上での懇親会。民族衣裳でお国自慢の歌、踊りが披露される。

☆その他の関連行事…OME Pデー…八月一日は横浜市

民、神奈川県民のために基調講演者等による講演会（無料）がパシフィコ横浜で行われる。

また「世界の人形と育児文化」（横浜人形の家）、「世界の子どもの絵画表現」（横浜美術館アートギャラリー）等の関連行事がある。

以上プログラムの主なものを簡単に紹介させていただいた。このOME Pの世界大会には子どもの保育・教育に携わる世界の人々が一人でも多く参加していただけるよう、国際会議としては参加費を比較的安くしている。

パシフィコ横浜はみなと未来地区にある日本が誇れる素晴らしい国際会議場で海に面した眺めのよい場所にある。本誌の読者が一人でも多くご参加いただけるよう願っている。

（立教女子学院短期大学・OME P日本委員会理事）

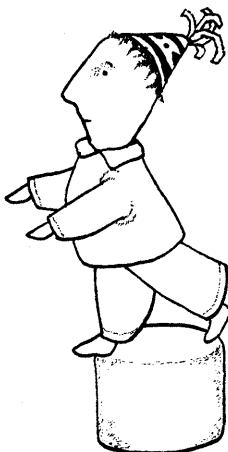
世界大会の問い合わせ先

第二十一回OME P世界大会事務局

〒三三六 浦和市元町一一八一二十一一〇二

TEL ○四八一八八三一九六七〇

FAX ○四八一八八一一二四二〇



幼児教育から見た リトミック

高松 弥生子

一・ひとつの反省

リトミックを通じて、こどもたちと付き合うようになって、五年になります。

私が、幼稚園の先生をしていた頃、いつも自分の中で“おかしいな？”と思っていた事。おかえりの時間、黒いピアノにむかって必死に伴奏を弾く「私」と声を張り上げて宙を見つめて歌うこどもたち。楽しいはずの「手あそび」は、静かにさせるためのテクニック。もっとどうにかできないから、と思いつつも、忙しい毎日。行事の前になると、歌や踊りの練習は、もつとすさまじいものになっていました。

今この自分を考えると、あの時の反省があるから、今こうして、「リトミックを知りたい！」「こどもたちにも、伝えたい！」と思う自分がいる様に思います。ところで、皆さんはリトミックを「存じでしょうか？」

「音楽・リズムの事でショウ、小さい」むもの…

▼いじりって、あたまあたま

…

「むうさんになりたり、りすさんになりたりする

アレでしょ、う？」

「楽器も使って、歌も歌って楽しくて、こどもに

いいみたい」

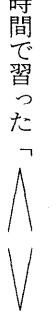


カット・筆者

うん、うん。私の感じているリトミックの魅力は、目にみえない「魂」です。といって、五年くらいかじって、偉そうに説明するなんて、おこがましい！

そこで、今回は、私がどんなふうにこどもたちと過ごしているのかを紹介しながら、音楽を通して学んでいくリトミックに、ほんの少しでも興味をもつて頂けたらいいなと思っています。できるだけわりやすい目標を、と思って思いついたのは、「だんだんおおきく、だんだんちいさく

二、「だんだんおおきく、だんだんちいさく

音楽の時間で習った「」の記号。

頭でわかつて、いるこの記号の意味を「頭だけではなく、身体も使って知つていこう」とするのが、リトミックです。

だんだんちいさく」です。

「」どもたちは、（ピアノを習っている数人を除けば）この記号を知りません。三歳くらいのこどもに、「だんだん……」なんて説明してもボカーンとしているだけなのは、皆さんもよく存じだと思います。

でも、なにかの合図で、できるだけ早く「やいさくなつたり、おおきくなつたり」するのは、大好きです。これが、第一段階です。この経験を何度も繰り返します。この「何回も、繰り返して経験する」とは、リトミックの大事にしている事です。同じ事をただ繰り返すのではなく、この場合だつたら、「何かの合図で」というところで指導する者が、自分なりに工夫して考えていく事が大切です。いつも同じでは、何かの訓練と同じになってしまいますから。

さて、「大きくなつた時」足の先から頭の先まで、自分の身体は、どうなつてているので

しょう。経験の少ないこどもほど、十分に大きくなつたり、できるかぎり小さくなつたりするのは、難しいことです。

「もっと大きく、もっと大きく」「もっと小さく、もっと小さく」と声をかける事で、「」どもたちの身体は、どんどん大きく、また小さくなつていきます。そうやって、こどもの持つていてる力の後押しをするのが、私の役目だと思っています。

一緒にいて思うのは、小さいクラスほど、時間的には短くとも、繰り返し、ゆっくり、わかりやすく体験する事が、必要だという事です。

いよいよ第二段階。「だんだん……」に入りますよう。この「だんだん」は、毎年おもしろい様に、同じ事が起ります。

こども（小さくなつてうずくまっている）

私は　　たいこの音でだんだん大きくなります

三。(たいこ鳴る)

こども (シーン。そのままうずくまっている)

(一人だけで大きくなりながら) おー

い、おーい…………?

ペーターになってみる、とか。そこに、ぴったりで、きれいな楽しい曲が流れいたら、どんなにおもしろいでしよう！

大切なのは、「」の時」の身体の感じです。

「△▽」を見て、"知つてゐる、知つてゐる!"

ではなくて、みんなと楽しく身体を動かした体験の

こどもたちには、言葉だけでは、わからないのですね。「だんだん小さくなる」方が、ずっと楽な様です。「だんだん大きくなる」には、よほど我慢しないと「だんだん」にはなりません。頭と身体を集めさせないと、たどり着けません。よく見ると、最初と最後だけ合わせているこども、早く飛び出し過ぎて、恥ずかしそうにしているこどもがいます。自分の気持ちと身体がなかなか一つになりません。

わかつてもらうためには、いろいろな方法で感じてもらう様に工夫します。花がだんだん大きくなつてくる感じ、ジャックと豆の木のはなしをみんなでする、大きな壁に上下にゆっくりペンキ塗り、エレ

▼カラーボードをつかって



中で、どんな感じだったのか覚えていて欲しいと思います。そして、もし、大きくなつてこの記号に出会つた時、この感じを表現してもらえたらしいな、と思います。

音楽のためのリトミックは、目に見えない内面への問い合わせが一杯です。

三・リトミックの伝えるもの

リトミックには、「調和する」という意味があるそうです。これは頭と身体がひとつになつて“調和して”はじめて理解した事になるといふのです。知育偏重ではない、こういふところも、リトミックの魅力の一つでしう。

「どもたちと話している事に、もう一つの「調和」があります。それは、部屋のみんなが調和する

事、仲良くする事。よく輪になつて座るのですが、初めは、自分が自分がと一人ずつ前に出てきて丸く

なれないのが、少しづつ、まわりの中の自分の位置や入れない人がいないかなど、気を付ける様になります。

部屋の中では、「ひととおなじ」ではなく、「自分だけにしかできない」動き、表現を大切にしたい。

そのためには、ひとりひとり大切な友達である事を知つていて欲しいのです。「へんなの！」の一言で、友達でなくなるのは、残念です。私の言葉かけひとつひとつも、部屋の空氣をつくつてゐる事に気をつけたいと思います。

こうして書いていくと、リトミックは決してこどもたばかりのものではないし、音楽をしてゐる人ばかりのものでもない事がおわかり頂けると思います。

○ 頭だけでなく、からだを動かしてひとつになる事で、理解を深める。

▲ テニスボールをつかって

この事は、こどもを育てる、教育、に関わる全ての人にとって、あたりまえの事でありながら、なかなか実現できないでいるのが現状ではないでしょうか。

またもう一方では、私自身を含めて、保育者にあります。

○ こども向けの幼い動きと発声。（どうして、ぞうさんの動きはいつもお鼻がブラブラなのでしょう？ どうして、木は背伸びをしておててキラキラなのでしょう？）

指導者が、いつも同じ動きに甘えていると、こどもたちも同じような動き、雰囲気にしかならないと思います。

○ 幼稚園風ピアノ伴奏。

ただ弾けばいいのではなく、ひとつひとつの音を大切に、その音にあつた、雰囲気に合った伴奏を用意しましょう。何も名曲（迷曲？）を弾くことはあ



○ こどもの興味・発達に合ったものを用意して、

何度も経験する。

○ ひとりひとりを大切に、そのこどもの持っている力の後押しをする。



らでしょう。リトミックの魅力にとりつかれながら、「これでいいのか、これでいいのか?」と問い合わせにはいられないのは、この「怖さ」があるからだと思います。

音楽に対する知識の不足に、勉強する事は山ほどあつて、「おわり」はなさそうです。

毎週、毎週、にこにこと元気になだれこんでくる子どもたち、黙つて暖かく見守つてくださるお母様方に支えられて、絶えず学んでいくことを忘れずに、細く長く私のリトミックを続けていければと思っています。

最後に、たくさんの先生方が、全国各地で、リトミックの普及に努められています。ひとりでも多くの方が、リトミックを体験してくださる事を願っています。

こうして考えていくと、自分自身をよく見つめ直して、絶えず新しく生まれ変わつていないと、「こどもだまし」で終わつてしまふことがわかります。

リトミックが、「こどもたちだけのものではないの

りません。

は、「表現する事=保育者自身、指導者自身」だか

(広島市在住)

私の 子ども 時代(8)



昭和の初めの頃の 幼児の過ぎし日を振り返り

陳

繡

明治28年の日清戦争後、第二次世界大戦終了までの六〇年間、台湾は日本の植民地でした。陳さんは日本で生まれ、台湾の人でありますから日本人として教育をうけ、育ちました。戦後、日本から離れ、今度は台湾と中国という二つの国との間で、精神的につらく苦しい時代もすごしたそうです。

今回は幼い時をすごした日本での良き時代の思い出を、「陳さん」と自身に綴っていただきました。

(編集部)

記憶の薄れぬ間に書いておきましょう。生まれ

語)を、一日も忘れていません。

出てから母國語、「國語」と呼んでいた言葉(日本

私は大正十五年十月六日に東京牛込区に生ま

れ、間もなく昭和元年になり、数少ない大正十五年・昭和元年に生まれた者となりました。

父は慶應大学法学部政治経済学部に在学中、母は近くのお茶水（本当はお茶の水ですが母はよくお茶水と話す）に行っていました。すぐ結婚育児のため、「ほとんど勉強も出来ず年取っちゃつた」と何時もこぼしていましたが、翌年に妹が出来、母はいよいよ勉強を断念せざるを得なくなりました。

その昭和二年は東京地下鉄、浅草より銀座までの「銀座線」開通、地上は「市電」いわゆる「チンチン電車」の開通。そのお祝いに、紙で作った色とりどりのお花や金、銀、赤、緑、黄のモールで華やかに飾られた電車が線路をコトコトチンチンと走り、時にはお花やモールを落としながら家の前を通りました。そのモールやお花を拾い、私は夢中になつて電車の後を追い、「迷子」になつて大騒ぎになつた事もありました。思えば非常に

のんびりしたあの頃でした。「あつ、小さい女の子が線路を歩いている」とお巡りさんに発見されました。「迷子の迷子の子猫ちゃん」ではないが、何を聞いても分かる筈はなく、お巡りさんに「お家の近くには何があるかしら」と聞かれ、私はうろ憶えの「大きなお風呂屋さんと材木屋さんがある」（これも私にとつては大きな事柄に出会つた場所なので、特に、よく憶えていたのです）と答え、お巡りさんはそれを起点に探しつつの家の近くまで自転車でつれて帰つて来て下さいました。家では近所中大騒ぎ。近所には何故か幼い子供は私一人だけ。そのため皆さんよく可愛がつて下さりお菓子を頂いたりしたので、夕方になつても家へ帰つて来ないし近所にも見当たらないと、皆は夕飯の支度の手を止めて、迷子を探している時に、お巡りさんに連れられ帰つて來たとか…。その時母は近くのお稻荷さんに手を合わせて、一生懸命祈つていた所でした。無事、大騒動

一件落着。お騒がせして申しわけございませんでした。今更ながら深々と頭を下げます。

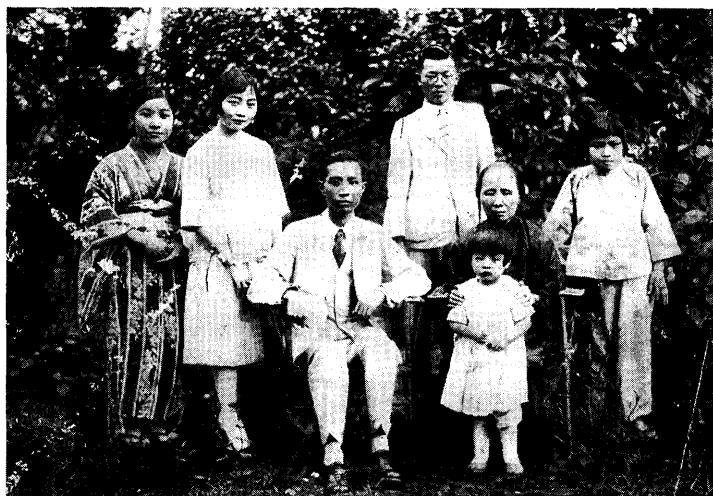
お風呂屋さんの大事件とは、お風呂屋さんから出火、大火事になり火の手が家まで来そうなので逃げ回り大恐怖に会つたこと。材木屋さんの件は材木屋の周りで遊んでいたら材木がバラバラと倒れて来て私は下敷きになり、九死に一生を得たとはオーバーですが、倒れた材木と材木の間に小さな私は入り助かった事。これも勿論大騒ぎ。材木屋さん、お風呂屋さん、私にとっては恐ろしい所、幼児の頃に出会った恐怖は常に付きまとつものです。材木屋の材木が立てかけてあるのを見ると、今でもこわく、遠く離れて歩きます。お風呂屋さんを見ると紅蓮くれんの炎を思い鳥肌が立つのです。

当時、新しくできた電車の行き来する道路はとても広く広く見え、向かい側へは中々行かれない位でした。その道路に面した玄関はとても明る

く、格子戸をガラガラと開けると一段上がり左右へと廊下があり、向かつて右手はすぐに階段、二階へです。大きな畳の広間を通り縁側に手すりがあり、廊下のお庭が一望出来、背の高い生け垣がぐるっと囲つてお向かいの家は見えません。縁側に籐椅子と机があり、その椅子に登つてみても見えないのです。

冬になると北側の渡り廊下の窓で雪兔、赤い丸いお盆に雪で白い兔を作り、南天の赤い実をお目々にささの葉を耳にと母が雪兔を作ってくれた光景もはつきり昨日の様に。妹の小さなお手々と「兎ちゃんね」と遊んだり、おイネさん（働いていたお手伝いさん）と一緒に雪道を歩いては大喜びでした。鉢のついた下駄は雪でつまつてならなくなり、急いで家へ帰り、またはきかえて、と何回も行つたり帰つたり、大人たちを困らせたと母は何時も話していました。

夏になると葉山の別荘へ行き、海辺で遊んだりしました。母とお揃いのゴム靴、オレンジに黒の模様、海水着も同じ色、黒に斜め横に太いオレンジ色の配色でした。別荘では父の従兄弟達も一緒に夏を過ごしたりしました。また、時々台湾へ帰省する事もありました。当時は四泊五日の船旅。船は大阪商船、三井商船等の高千穂丸、蓬萊丸、三、四万噸級の大きな客船でした。横浜や神戸から乗船します。船内はずーっと向こうまで赤い絨毯が敷かれていました。船室の白い丸い窓から波がバッサーンとガラスに当たる。白い階段を真っ白な制服姿のボイイに手をつないでもらい、甲板で波しぶきを見たりです。でも三度の御食事に大ホールに行く時は必ず着替えさせられるのは嫌でした。面倒ですね、朝食の時はきちんとした清潔な服を、昼は又違った少しスポーティな、例えば私でしたらセーラー服、夜はヒラヒラとフリルのついたドレッシィな服、靴下、靴も全部替えて



►昭和四年頃、東京にて。左より、おイネさん、母、父、叔父、祖母、私、雇人。

と、なんて面倒なことでしよう。でも楽しい音楽

を聞いているところ機嫌になります。家に置いてきた大事な紅い蓄音機を思い出します。明るい紅色で高さ二十センチ正方の箱型で、蓋を上へあげると下に降りて来ない様になっていますので、その蓋の内側にしまってあるレコード掛けます。大きいレコードは二十七センチ位で小さいのは十センチ位。少し暗い赤い色や明るい紅やオレンジ色のとあり、歌のあるのや、歌のない音楽だけのがあります。私は歌があるのが好きでした。「お手々つないで」「ポッポッポ鳩ポッポ」「春が来た」「さくらさくら」「金らん縫子の花嫁人形」「狐の嫁入」とか、音楽の方は「ドナウ川のさざ波」「子守歌」「乙女の祈り」とか、私にはむずかしくて（でも後で返つて好きになりましたが）。手で回すので時々音が眠つてしまいそうになり、急いで手回しを回しますと元気を出し、また歌い出す昔の蓄音機です。父が音楽が好きでしたので音楽の教

育ですね。

父はヴァイオリソの名手でしたが、演奏会には出ませんでした。自分で楽しむものだからと何時も話していました。私は子守歌に「トロイメライ」「スーザニール」を聴いて大きくなりました。名曲、名演奏に何時も聴きほれていきました。

船旅も台湾の基隆港に安着。賑やかなお祭騒ぎの様なプラスバンド等のお出迎えです。夜行で台中へ帰り、母の実家の方々のお出迎えの後、「五分車」というミニ機関車（これは製糖会社の砂糖キビを畑から工場へと運搬する交通機関です）で、一路といつても小一時間位で霧峰の我家です。そして一、二か月過ごしました東京へと、父の勉強、修士を取るためとか、東京—霧峰とよく行き来しました。勿論、母も私もお供です。そしてまた東京の生活が暫く続きます。やがて昭和四年になり私も少しは物も分かりかけて来ました。父母に連れられ、初めて飛行機のショーの様なもの

を見ました。双翼の白赤のシマ模様の飛行機を父は赤トンボといい、それが上へ上つたり急に降りたり、クルリと回転したり、皆はワアワアと大騒ぎでした。ある時、もう日暮れて薄暗い頃に父母と一緒にドイツの飛行船（ツェッペリン号）の東京訪問を見に行きました。グレーの大きな船体はゆつたりと着陸、非常に印象的でした。

東京の生活は何時も一つ年下の妹と一緒にでした。近所に小さい子がないからでしょう、ほとんど家の中の遊びです。勿論お人形さん、ままごと、お庭から赤い椿、タンポポやら、お花を取つたりして。時々電車ごっこ、父母もおイネさんも一緒に一本のひもの中に入り「チンチンゴトゴト」と。或いはおもちゃの電車をネジをかけグルグルと線路を回り「赤信号」で止まつたり、駅でも止まります。カンカンカンと鳴らして止まつたり走つたりです。たまには、まりつき、ゴムまりです。「テンテンテんまり」と歌いながら、お

じやみ（お手玉のこと）も「おーさらいつ」といながら、或いは折紙でいろいろ折つたりと、幼児の遊びは何時の時代も同じですね。

私は時々家庭の生垣をかきわけて、隣のお庭まで勝手によく入り込みました。生垣をぬけてすぐ小川があります。水は見えないのですが、一寸深く、そのため家からお隣まで橋で渡ります。橋といつても丸太を二本両側に、人の歩く真中には板を通してあり、少し土をもり、草も生えてます。大分前からあつた橋でしょ。橋を渡り遠慮なくか、図々しくか、人様のお庭に入り込み、青々とした芝にふみ入りますが、待つて下さつていたのか、藤色の着物に長いエプロンの女人人が来て私を抱き上げ、側の大きな石の上に座らせて下さいました。その後に洋装の上品な女の方は、白い紙に包んだ物を私の片手とポケットに入れ「おあがり」とい、ニコニコと私を見てはエプロンの女の人に何か話しています。私は半紙を開

けると、まあなんできれいなお菓子、椿の花の形と手まりのあめ…、私は食べるのが惜しくて何時までも持っていました。家に帰り母に話すと母はびっくり、早速御礼に行つたとか。でもこれがきっかけでよくその方のお家へ生垣をくぐつては行つたものでした。行かない日は向こうさんから迎えに来て下さいます。やがて父の卒業。母もお腹が大きくなり、二人の子供と次の子が出来るので、とても一人ではといって、三番目の子は台湾で産むことに決まり、帰台後、様子を見てまた東京へ来たいと話していました。

父は九歳から東京のある学校長の御一家に預けられ、教育をうけ、年に何回か帰省する事もありませんでしたがほとんど東京で暮らし、もうすっかりなれたという心境でしょう。

しかし母は反対に東京での生活は心細いところでした。当時父も母も台湾では一、二の名家。経済的には心配ないのでですが、母の実家は大

家族でそれはそれは賑やかで華やかでしたので、東京での暮らしは心細かったのでしょうか。結局、霧峰にとどまる事になりました。霧峰も台中におとらず大家族。母は家事に追われる事なく、子の養育に専念出来ました。そして私は霧峰で大勢の人々に囲まれ、小学校時代をすごすことになりました。その後の台湾での生活は、またの機会に残すことにしてしましょう。

(神奈川県在住)



編集後記

今月は、O M E P 、オン・ステージ、リトミックと、夏休みにむけて自己研修をという方におすすめの記事がそろいました。この他にも各地、各団体で盛りだくさんの研修が企画されることと思います。昨夏は大変な酷暑で、勉学どころではありませんでしたが、今年こそは有意義な夏を過ごしたいものです。

我家の息子も今年は六年生です。集団登校のリーダーとして、十人の下級生のめんどうを見、また頼りにされながら、毎朝登校しています。本当は自分も一緒になつてふざけていたいのかかもしれないのに、六年生

息子が自分で判断したことを信じて見守るということでしょう。でも、ちょっと過保護ママの私に、それができるかどうか…心配です。（K）

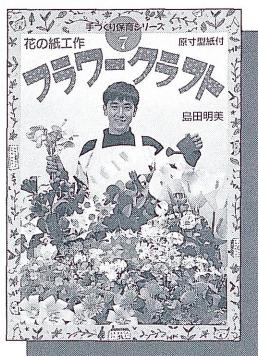
第九十四卷 第七号
(一九九五年七月号)
定価四五〇円(本体四三七円)
発行 平成七年七月一日
編集兼発行人 田代 和美
発行所 日本幼稚園協会
印刷所 図書印刷株式会社
〒112 東京都文京区大塚二-1-1-1
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発売所 株式会社 フレーベル館
〒113 東京都文京区本駒込

☆本誌ご購読のご注文は発売所
ベル館にお願いいたします。

☆万二 落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。

手づくり保育シリーズ⑦

花の紙工作 フラワークラフト



好評「思い出プレゼント」の著者のペーパーフラワー特集。これで保育室は、一年中、花でいっぱい。明るく楽しい雰囲気の中で、保育を展開しましょう。

- ★身近な花を紙で作って、飾ったり、プレゼントしたり。
- ★サクラ、チューリップ、タンポポ、バラなど31種類。
- ★壁面やアーチの飾り方、贈り物にアレンジしたりの用途についての提案も盛り込まれています。

島田明美・著

B5判・96頁・定価 2,200円（本体 2,136円）

手づくり保育シリーズ①

歌ってだいすき－湯浅とんぼの遊びうた傑作選－

湯浅とんぼ・著

B5判・104頁・定価 2,200円（本体 2,136円）

手づくり保育シリーズ②

布で作った アイデアおもちゃ

鈴木美也子・著

B5判・96頁・定価 2,200円（本体 2,136円）

手づくり保育シリーズ③

思い出プレゼント

島田明美・著

B5判・96頁・定価 2,200円（本体 2,136円）

手づくり保育シリーズ④

保育に生かす 55の生活アイデア

ほいく♥けんきゅうかい・著

B5判・96頁・定価 2,200円（本体 2,136円）

手づくり保育シリーズ⑤

劇あそびがとびだした

花輪 充・著

B5判・104頁・定価 2,200円（本体 2,136円）

手づくり保育シリーズ⑥

環境構成 赤ちゃんグッズ

八王子保育研究会・著

B5判・96頁・定価 2,200円（本体 2,136円）

キンダーブックの

フレーベル館

おおきなしそん ちいさなしそん

こんちゅう

全10巻

- ①てんとうむし ②ちょう
- ③むしのたまご ④みつばち
- ⑤とんぼ ⑥ようちゅう
- ⑦おとしふみ ⑧かまきり
- ⑨あしもとのいきもの
- ⑩かぶとむしのなかま



私たちをとりまく自然界には、どんな虫たちが生息しているのでしょうか。子どもたちの大好きな昆虫の仲間のそれぞれの特徴や生態、卵から成虫になるまでの過程をわかりやすく、イラストやカラー写真で紹介します。

A4変型判・各28頁・定価各1,000円（本体971円）・セット定価10,000円（本体9,710円）

かがく

全10巻

- ①あぶら ②たまご
- ③いし ④ふじさん
- ⑤ほね ⑥みず
- ⑦いろ ⑧かび
- ⑨かみ ⑩しゃぼんだま



私たちが日常、何気なく見たり、さわったりしているもの、これらのものたちには、どんな性質や特徴が備わり、私たち人間にとってどのように有用な役割を担っているのでしょうか。わかりやすく精緻なイラストやカラー写真で構成しました。

A4変型判・各28頁・定価各1,000円（本体971円）・セット定価10,000円（本体9,710円）

キンダーブックの
フレーベル館